

◎人間革命の宗教

大聖人の仏法は、あくまでも、現実世界で悪戦苦闘している民衆を救う仏法です。「寂光の都」「本覚の栖」とは、仏法が説く幸福境涯のことです。自身の胸中に、仏界の生命を現す以外に、真実の幸福への道はないのです。

そのために、「現世安穩・後生善処（今世の生は安穩であり、後世は善い処に生まれる）」の妙法を受持するのであると仰せです。

(中略)

どこまでも大事なのは「今」です。

真の「現世安穩」とは、何があっても“私には御本尊がある”ということです。そして、“私には師匠がいる”“同志がいる”と、何ものにも揺るがず、共々に励ましあい、広宣流布に生き抜くのです。そのために学会という安全地帯があるのです。

(『人間革命の宗教』127 ページ)

◎新・人間革命 勝ち鬨の章

「人それぞれに、さまざまな思い出がありますが、普通、それは、歳月とともに薄らいでいってしまうものです。しかし、信心修行の思い出は、意識するにせよ、無意識にせよ、未来永劫の最高の思い出として残っていきます。広宣流布の活動は、因果の理法のうえから、永遠の幸福への歩みであり、歓喜と躍動の思い出として、最も深く生命に刻印されていくからです」

(『新・人間革命』第30巻〈下〉185 ページ)

◎池田大作先生の指導選集 [上] 幸福への指針

私は「生命を完全燃焼させた思い出は、永遠に消えない」と言っておきたい。なかならずく広宣流布に燃やしきった思い出は永遠です。

この世に生まれて、いったい、何人の人を幸福にしたか。何人の人に「あなたのおかげで私は救われた」と言われる貢献ができたか。

人生、最後に残るのは、最後の生命を飾るのは、それではないだろうか。

(『池田大作先生の指導選集 [上] 幸福への指針』215 ページ)